



私が幼児教育を志した頃(8)

津守 真

青年期の自我の形成を振り返って

私は幸いに青年期に偉大な人々に出会った。戦争の時代をくぐり抜け、靈性をもった生きた先輩たちである。その中には、矢内原忠雄、南原繁、藤井武などがある。

南原繁は、私の大学生時代の東大総長である。式典のたびに行われた南原総長の演説に私は欠かさずに出席したが、昭和二十三年九月の私の卒業式の演説では「人間の使命」と題して、人間の存在を律する「精神」について述べられた。それから何十年も経た後に、私が子どもの発達における自我論を考えたのも、精神というこのときの南原先生の考えが基底にあったのかと思う。

この日の南原先生の演説は、『南原繁『真理の闘ひ』(東大総合研究会出版部昭和二



十四年刊)に掲載されているので、それを参照しながら次に述べたい。

「終戦後三年、大学卒業期も漸く平常に復し……戦時中動員された学生のうち、遅れて帰還した人々を加えて、ささやかながらこの場所に、戦争の名残の本学最後の九月卒業式を挙げるに至ったのである。」

「われわれはひとり外的権力や圧迫から自由であるというだけではなく、何よりも『自己自身』に於いて自由でなければならぬ」と南原総長が語り始められたとき、私は三年前に軍隊から解放されたときの自由な空気を思い起こした。南原はそこにとどまらず、更に『自己自身』における自由を指摘した。それは外的環境の変動に左右されない内面の自由である。前者の自由は時がたつうちに再び現実の不自由からめとられてゆくが、後者の自由は、常に変動する現実の状況を越えたところではたらく「精神」である。

南原の演説は更につづいて次のように言う。「人間が政治的存在であると共に、それ自身一個の道徳的精神的実在であり、そのことは、変わりゆく一定の時代の政治的形態や社会様式によって、少しもその重要性を減じないところの人間の特質であり、尊厳である。何故ならば人格はその本質において精神であつて、この精神が人間の全体的存在を規律しなくなるとき、人間はもはや自らの統一と平衡を保ち得ないからである。それはついに人格そのものの破滅に導かずにはおかぬ。」(傍線筆者)



ここには政治学者をこえた南原の人間論がある。私はそれから数十年を経て、子どもを経験を組織化し調整する自我の機能を考えてきた。乳幼児期から各発達段階で、危機に立つごとに自我は強められ、成人に至るのが自我の形成である。老年になって、過去から未来の全体を見直すとき、マイナスとプラスの両方を含めて経験の全体を肯定的に見直すことができる。人の自我はそれぞれにふさわしく全うされるのではないだろうか。それは人を責め、自分を責める道徳的反省によってはなされ得られない。「ゆるし」によってはじめて可能になる。この作業は老年だけのことでなく、若いときから始まって日々繰り返されている。それは人間の日々の営みであるが、究極的には宗教に至る。

南原は内村鑑三の愛弟子であった。私はこの時期、内村鑑三全集、藤井武全集を耽読して、南原の講演に深くうなずいた。

*

私は自分の生い立ちをキリスト教なしに考えることはできない。私が小さいときから、私の家にはキリスト教の牧師たちが何人も出入りしていた。小学生のときに私の家の家庭集會に話に來られた三井芳太郎先生は、大井町の靴屋の地下室で鐵道省のキリスト教信者のための集會をもつておられた。私も二、三度行つたことがあるが、



ローマの初代教会のカタコンベのような薄暗い小さな部屋だった。真に立派なクリスマスチャンだったのだろうが、すでに老齢の先生は、はずれそうになる鼻眼鏡の下で口をもぐもぐ動かして定かでない発音で話されたので、私と妹はおかしさをこらえるのに懸命だった。

私の父の書齋には、父が若いときアメリカに行ったときに求めた大量の英語の聖書の注解書、説教集などと共に、内村鑑三、植村正久、上村邦良、藤井武などの書物が書棚の中央を占めており、私は少年の頃からキリスト教の書物に親しんでいた。私の父の家系は昔から神道の神職であるというが、父は若いときに東京に出て無線電信技師になって以来、キリスト教精神によって近代的な家庭を築こうとしていた。

内村鑑三の柏木の聖書講義には父母ともに熱心に通い、南原繁、矢内原忠雄、藤井武のことを尊敬をもってしばしば語っていた。ここで私は、たとえ人が師をどんなに尊敬しようとも、師も友もそれぞれ絶対者の前にひとりで立つ人格であるということをつけ加えておかねばならない。

*

青年の日に私が心を動かされたもう一人の人にアルベルト・シュヴァイツァーがある。



南原総長は、この日の演説の終わりに戦争直後の日本の現状を見つめて、シュヴァイツァーに言及された。

「現代が直面する経済的社会的困窮と破局は惨めなものがある……これに立ち向かうには、政治的社会的組織のみでは不可能である。内面的に自由を確立すべく努力すること、そしてその自己を、自分もその中に在る世界と同胞のために生きること、すなわち、人生と社会のいかなる領域の中にも、真の人間性と自由を回復する力を必要とする。現代人類大衆の間に欠けているのはそうした精神と人格の力である。」「他日講和が成立し、日本が世界にひろく交通を許される暁」に、それぞれの職場において各自が人間としての使命を果たすよう訴えた。昭和二十三年は、未だ日本と世界の国々との間に講和条約は締結されていなかった。シュヴァイツァーは、ドイツで神学、哲学を修めて後、アフリカに一生を献げようと、医学を修め、一九一三年にアフリカに行った。ヨーロッパ人のこれまでこの大陸と黒人にたいして犯した罪科を償おうというのが動機であった。南原は、「それは自己に絶えず内面的に深化し向上せしめると同時に、他人の運命に働きかけ、世界の苦悩を自らの苦悩として戦うところの深い倫理的宗教的な動機から出た行為である。」と言う。そしてあえて世界と言わず、敗戦日本の荒廃した地方と同胞の間になすべき仕事は夥しくあることを語った。

ずっと後になって、私はアフリカでシュヴァイツァーのもとで働いた人から話を幾



度か聞く機会があった。現代のアフリカはシュヴァイツァーの時代のような暗黒大陸ではない。社会、政治状況は著しく変化している。シュヴァイツァーの病院は近代的医療機関としては批判されるべきものもあり、長年の間には彼の人間の弱点も表面にあらわれて、理想を求めて彼のもとを訪れた人々を失望させたという。このことは彼の病院だけのことではない。社会の変化の中でどこにも生じる、ひとつの組織の変遷の歴史でもある。だからと言って、このことは、ひとりの人間が生涯の出発点において、時代が迫った倫理的必要に答えて身を挺して戦った人々の人生の価値を低めるものではないだろう。

特別保育室開設前夜―障害をもつ幼児との出会い

卒業後間もなく、私は障害をもつ幼児（当時は精神薄弱児と呼んでいた）と出会うことになった。そのことが私の生涯の大きな部分を占めることとなったので、次にそのことについて述べたい。

大学在学中から愛育研究所に出入りしていた私は、卒業後は無給研究員となって、新生児室や乳児室に通った。昭和二十四年に教養部長が山下俊郎先生から牛島義友先生に代わり、その頃はまだ珍しかった児童相談が始まった。竹田俊雄先生が主任で、森脇要、星野近子その他の方々が参加しておられた。波多野勤子さんが客員で来てお



られたこともある。私は牛島義友、森脇要、木田市治らが昭和十三年に作成された愛育研究所乳幼児精神発達検査をする役だった。

昭和二十四年四月のある日、双子の幼児を連れて相談に来られたひとりの母親がいた。私はいつものように、乳幼児精神発達検査をした。黙ってうつむいたまま何もせず、検査不能だったが、発達指数は四十位と推定し、母親に伝え、大きくなっても普通の能力の四十パーセント位のままだろうと述べた。その母親は直ちに、「そんなことは分かっています。この子たちが通える幼稚園を教えてほしいのです」と言っただけで帰ろうとしなかった。その頃の日本は、出産率が急増し、幼稚園も小学校も、一学級五十人というところも珍しくなかった。午前午後の二部制を実施していて、知恵遅れの子どもはどこでも入園を断られた。母親はそのことも分かっていた。私共が話していた小さな部屋には西陽が射していたが、次第に暮れゆく夕闇の中で私は困惑していた。あの日の相談室の様子を私は忘れることができない。次回までに相談しておくと言うと、漸く母親は腰をあげた。翌日、教養部長室での昼食のときに、私はこの話をした。教養部長の牛島義友先生は、直ちに、必要なことならやればいいと言って、昭和十三年に愛育研究所創設時から「異常児保育室」が設置されて、三木安正がそれを担当していたことを話された。保育室は研究所一階の突き当たりの部屋で、創設当初から一方視の観察窓がついていた。保育室側が白色の絹地、観察側には黒色の粗い目



の布が張られている立派な観察室であった。いま考えても幼児用の部屋としては最高の部屋だった。一隅には大きなドルハウスがあり、応接間、食堂、トイレまでついていて、暗緑色の屋根の魅力的な人形の家だった。皇太子殿下（現天皇）御降誕記念に御下賜のものだという。戦時中、三木安正は保育問題研究会に熱心だったことから警察に睨まれて何ヶ月も留置所に入れられ、岡部弥太郎先生が釈放に尽力されたことも聞いた。空襲の激化と共に「異常児保育室」は閉鎖された。

戦後昭和二十三年より、その保育室は幼稚園に使われていた。牛島先生は三階の先生の研究室を開放するから異常児保育室を再開するようにと言われた。一ヶ月の研究期間を与えられて、私がそれを担当することになった。

私はまず、三木安正を千葉の自宅に訪ね、病床にあった先生の枕元で話を聞いた。当時東京都内には、神童小学校、大和田小学校他、数校の特殊学級があるだけだった。精神薄弱児施設としては滝野川学園があった。それらを訪問する計画を立て、また、イタール、セガン、デカードル、コルヴィヌスなどを読み始めた。

私は異常児保育室という名称が気に入らず特別保育室と呼んだ。これは間もなく家庭指導グループと更に名前を改めた。その申し込み書をガリ版刷りにした。

この子どもたちのことに関心をもって研究しているのは、本当に一握りの人達だった。